Kurume University
Psychological Research 2007, No.6, 91-98

社会福祉学科専攻大学1・2年生と3・4年生の子育てイメージ比較

津田史彦[1)]，辻丸秀策[1)]，大西　良[1)]，占部尊士[1)]
ポドリヤク・ナタリヤ[1)]，鋤田みすず[2)]，藤島法仁[1)]
福山裕夫[3)]，保坂恵美子[3)]

要　約

社会福祉学科専攻の大学1・2年生と3・4年生の子育てに関するイメージと，彼らの属性・経験および子育てに対する意識との関連を明らかにした。調査の結果，以下の4点が示された。①子育てに関するイメージの各項目の得点のうち「はっきりした―ぼんやりした」など2項目に関して，1・2年生と3・4年生の間で有意差が見られた。②子育てに関するイメージは，1・2年生では「活力ある情」「肯定」「安定した快さ」の3因子が，3・4年生では「主体的な温和さ」「余裕」「安定した快さ」の3因子が抽出された。③「将来子どもを持ちたい」など，子育てに対する7項目の肯定的な意志や考えが，子育てに対するポジティブなイメージと関連していた。④「将来子どもを持ちたい」などの項目と，子育てに対するイメージとの関連のしかたが，1・2年生と3・4年生の間で異なっていた。

キーワード：子育てイメージ，福祉教育，福祉学専攻学生，児童福祉，子育て支援

はじめに

わが国では出生率は低下の一途をたどり，2005年の合計特殊出生率は1.25と過去最低を更新した（厚生労働省ホームページ，2006）。ますます加速する少子・高齢社会化の趨勢の中で，子どもを生み育てやすく，子どもを健やかに育てられる環境づくりのために，フォーマル・インフォーマル両方の資源を活用した子育て支援策の必要性は高まっている。行政の施策としてはエンゼルプラン，新エンゼルプラン，次世代育成対策推進法，少子化社会対策基本法といった一連の流れがあり，その目的が，共働き世帯を対象とした子育てと仕事の両立支援から，より一般的な保育関連施策へと徐々に軸足を移しつつある（高橋・山縣・才村，2005）。これはいわゆる児童福祉のユニバーサルサービス化とも軌を一にし，従来の養護中心の施策から，保育をはじめとした，より一般的な福祉サービスへの転換が進みつつあるといえる。

若者が子育てに対して抱くイメージを扱った研究として，本田（2004）は，Semantic Differential Method（以下SD法）と6つの「信念項目」を用い，女子短期大学1年生の子育てに関する信念やイメージの同定を試みた。その結果，「陽気」「さわやか」など理想や憧れを反映したポジティブなイメージが抽出されたと述べている。

石松・江藤・山本（2003）は，自由記述と14項目の「対児感情尺度」を用い，看護学科大学3年生，保育学科短大2年生および栄養学科大学4年生を対象に育児イメージと対児感情を調べた。その結果，どの学生も育児についてアンビバレントなイメージを持っていること，また育児イメージと対児感情の間には有意な相関があることを明らかにしている。

1）久留米大学大学院比較文化研究科
2）本間病院
3）久留米大学文学部社会福祉学科

掛川（1996）は，大学生を対象に，子どもの世話に対するイメージを形容詞と動詞を用いた調査と，「子どもを持つ意味」質問項目を用いて，子どもを持つことに対する考えの調査を行った。その結果，子どもの世話により生じる疲労，不安や心配事をイメージしている者は多かったが，強い否定的な感情を抱いている者はほとんどいなかったと述べている。

これらの先行研究は，若者が子育てに対して抱いているイメージの一端を示しているが，そのイメージを測定するにあたり一定の妥当性が確立された尺度を用いた研究は少ないようである。そこで本研究では，SD法の項目として妥当性が確認された形容詞対のみを調査尺度として用い，加えて小さな子どもとの接触経験や親の就労形態といった対象者の経験・属性に関する項目，子育てに対する心構えや考えといった調査対象者の意志・思考に関する項目から成る調査票を用いた。まず若者が子育てに対し抱くイメージを量的に測定し，次に若者の将来の子育てに向けての希望や不安を明らかにし，若者自身の子育てに対する考え方や様々な属性との関連性について検討を行った結果，若干の新たな知見を得たので報告する。

また子育て支援と密接な関わりを持つ社会福祉学を専攻する学生に対して，子育てに関するイメージを測定した先行研究は著者の知る限りなく，新たな知見を示すものとして本研究は一定の価値をもつといえる。さらには1・2年生と3・4年生という，大学のカリキュラムの前半と後半とに二分した比較を行うことで，社会福祉学科における講義や実習といった学習経験が学生の子育てに関するイメージに与える影響について示唆を得，現在の福祉教育のあり方を考える際の一助としたい。

調 査 方 法

調査対象

福岡県の4年制大学の社会福祉学科1年生117名，2年生129名，3年生110名，4年生149名

調査時期

平成18年5月初旬～7月下旬

手続き

講義中に調査票を配布し，調査目的および倫理的配慮（後述）について説明して，調査に対する同意が得られた学生のみ回答してもらい，その場で回収した。

調査票の構成と内容

調査票は3部構成とした。

第1部は性別，専攻，小学校入学前の兄弟姉妹の有無，小さな子どもとの接触経験，両親の就労形態などの，調査対象者の経験・属性に関する12項目からなる。

第2部は「自分は将来，子どもを持ちたい」「自分は将来，子育てをうまくやる自信がある」「将来，夫婦共働きをするのには抵抗がある」「自分は親に感謝している」などの，調査対象者の意志・思考に関する13項目からなる。

第3部では学生の抱く子育てに関するイメージを測定するものとしてSD法を用いた。SD法は，Osgood, C.E（1952）が最初に理論構成を行い，言葉の意味の測定法として開発された。本研究では，井上・小林（1985）の先行研究を参考に，心理学や教育学の分野で用いられ，子ども観の測定に有効であると妥当性が確認された形容詞対51項目の中から，因子負荷量の高い上位20項目を用いた。回答として，20項目のそれぞれについて5段階の尺度（「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」の両極回答）のうち，いずれか1つを選択させた。評定尺度の配点はポジティブ回答である左側の極から右に向かって5，4，3，2，1と配点した。

統計的検定

検定には，統計パッケージSPSS11.0J for Windowsを用いた。なお，イメージの因子抽出では因子分析，平均値の差の検定ではt検定，各設問とイメージについては分散分析を行った。

倫理的配慮

調査実施にあたっては，対象となった大学の倫理委員会から承認を得た。

対象者には調査票配布時に口頭で説明を行い，調査に協力するか否かによって不利益を被ることは一切ないこと，調査結果は研究目的以外には用いないことを伝え，同意の得られたものに対して協力を依頼した。調査票は無記名方式とし，個人を特定できないようにした。回収した調査票は厳重に保管し，1年が経過した後に破棄する予定である。

結　　果

対象者の基本属性

対象者の基本属性をTable 1に示す。1年生では男性39名，女性42名の計81名から回答が得られ，回収率

は69.2%であった。2年生では男性30名，女性57名の計87名から回答が得られ，回収率は67.4%であった。3年生では男性25名，女性41名の計66名から回答が得られ，回収率は60.0%であった。4年生では男性24名，女性53名，性別不明2名から回答が得られ，回収率は53.0%であった。有効回答率はいずれも100%であった。

子育てイメージの平均値とその差の検定

両群の学生の抱く子育てイメージの各項目の平均値と，その差の検定結果をTable 2に示す。1・2年生

Table 1　対象者の基本属性

			男性	女性	不明	合計
1・2年生	1年	度数	39	42	0	81
			48.1%	51.9%	0%	100%
	2年	度数	30	57	0	87
			34.5%	65.5%	0%	100%
	合計	度数	69	99	0	168
			41.1%	58.9%	0%	100%
3・4年生	3年	度数	25	41	0	66
			37.9%	62.1%	0%	100%
	4年	度数	24	53	2	79
			30.4%	67%	2.5%	100%
	合計	度数	49	94	2	145
			33.8%	64.8%	1.4%	100%
全体	総計	度数	118	193	2	313
			37.7%	61.7%	0.6%	100%

Table 2　社会福祉学科専攻大学1・2年生と3・4年生の子育てイメージの差異
（独立サンプルの t 検定）

	1・2年生		3・4年生		t 値	自由度	有意差
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
明るい―暗い	4.37	0.76	4.36	0.72	0.12	311	n.s.
温かい―冷たい	4.63	0.62	4.69	0.57	-0.93	310	n.s.
楽しい―苦しい	3.10	1.22	3.21	1.15	-0.84	310	n.s.
安定した―不安定な	2.87	1.02	3.02	0.98	-1.34	310	n.s.
良い―悪い	4.27	0.79	4.43	0.71	-1.84	310	n.s.
外向的な―内向的な	3.76	1.00	3.68	1.00	0.70	311	n.s.
意欲的な―無気力な	4.25	0.76	4.27	0.73	-0.21	310	n.s.
陽気な―陰気な	3.78	1.01	4.10	0.82	-3.07	310	n.s.
優しい―厳しい	3.93	1.10	3.96	0.99	-0.20	310	n.s.
はっきりした―ぼんやりした	3.70	1.00	3.41	1.03	2.52	311	*
のんびりした―こせこせした	3.55	1.13	3.71	1.09	-1.29	311	n.s.
思いやりのある―わがままな	4.29	0.85	4.48	0.75	-2.07	310	*
きちんとした―だらしのない	4.18	0.83	4.23	0.79	-0.47	311	n.s.
元気な―疲れた	4.24	1.04	4.30	0.99	-0.57	307	n.s.
激しい―おだやかな	1.92	0.99	1.88	0.91	0.36	310	n.s.
気持ちのよい―気持ちの悪い	3.97	0.82	4.14	0.81	-1.89	311	n.s.
愉快な―不愉快な	4.01	0.88	4.16	0.89	-1.46	311	n.s.
まじめな―ふまじめな	3.91	0.84	3.99	0.75	-0.84	310	n.s.
生き生きした―生気のない	4.09	1.01	4.34	0.76	-2.47	304	n.s.
責任感のある―無責任な	4.48	0.86	4.63	0.70	-1.65	310	n.s.
平均値の合計	77.31		78.99				

$*p<0.05$

と3・4年生の子育てイメージの平均値の合計をみると，3・4年生のほうが1.68点高かった。

両群で平均値に有意差が認められた項目は「はっきりした—ぼんやりした」($p<0.05$, $t=2.52$, $df=311$)「思いやりのある—わがままな」($p<0.05$, $t=-2.07$, $df=310$) の2項目であった。このうち「はっきりした—ぼんやりした」では1・2年生のほうが，「思いやりのある—わがままな」では3・4年生のほうが有意に平均値が高かった。

子育てイメージの因子分析

イメージ評定項目の内部構造を明らかにするために，SD法を用いた形容詞対データの因子分析（主成分分析とバリマックス回転を併用）を行った。

因子分析の結果をTable 3，4に示す。スクリー基準に基づく固有値の変化と解釈可能性より，1・2年

Table 3　社会福祉学科専攻大学1・2年生の子育てイメージ因子分析結果

	factor1	factor2	factor3	共通性
思いやりのある—わがままな	0.802	0.153	0.169	0.696
元気な—疲れた	0.742	0.287	0.159	0.658
きちんとした—だらしのない	0.692	0.172	0.055	0.512
のんびりした—こせこせした	0.637	0.015	0.192	0.443
激しい—おだやかな	-0.589	-0.268	0.033	0.420
優しい—厳しい	0.587	0.202	-0.190	0.421
はっきりした—ぼんやりした	0.522	0.169	0.351	0.424
温かい—冷たい	0.185	0.817	0.045	0.704
明るい—暗い	0.252	0.735	0.131	0.620
良い—悪い	0.212	0.726	0.002	0.573
意欲的な—無気力な	0.414	0.541	0.169	0.492
気持ちの良い—気持ちの悪い	0.118	0.490	0.483	0.487
愉快な—不愉快な	0.359	0.481	0.328	0.468
楽しい—苦しい	0.092	-0.038	0.667	0.455
安定した—不安定な	0.104	-0.232	0.663	0.504
陽気な—陰気な	-0.027	0.210	0.652	0.470
生き生きした—生気のない	0.079	0.337	0.643	0.533
責任感のある—無責任な	0.129	0.311	0.481	0.344
累積寄与率（%）	19.679	36.820	51.247	
α係数	0.588	0.805	0.676	

Table 4　社会福祉学科専攻大学3・4年生の子育てイメージ因子分析結果

	factor1	factor2	factor3	共通性
温かい—冷たい	0.751	0.115	-0.256	0.644
意欲的な—無気力な	0.743	0.202	0.026	0.593
明るい—暗い	0.727	0.193	0.044	0.568
生き生きした—生気のない	0.680	-0.045	0.170	0.493
陽気な—陰気な	0.654	0.048	0.379	0.573
責任感のある—無責任な	0.646	-0.005	-0.029	0.419
気持ちの良い—気持ちの悪い	0.641	0.074	0.245	0.477
良い—悪い	0.608	0.312	-0.027	0.467
外向的な—内向的な	0.493	0.269	0.115	0.329
のんびりした—こせこせした	0.026	0.808	0.157	0.679
激しい—おだやかな	-0.083	-0.775	-0.107	0.619
思いやりのある—わがままな	0.339	0.732	0.034	0.652
楽しい—苦しい	0.110	0.079	0.849	0.738
安定した—不安定な	0.023	0.191	0.790	0.661
累積寄与率（%）	29.368	44.386	56.507	
α係数	0.842	0.656	0.657	

生と3・4年生の両方で3因子が抽出された。なお因子負荷量を見たところ，複数の因子にわたり影響が見られるもの，もしくは因子負荷量が0.45以下のものとして1・2年生では「外交的な—内向的な」「まじめな—ふまじめな」の2項目を，3・4年生では「優しい—厳しい」「はっきりした—ぼんやりした」「きちんとした—だらしのない」「元気な—疲れた」「愉快な—不愉快な」「まじめな—ふまじめな」の6項目を除外した。各因子の信頼性を確認するため，Cronbachの内的整合性の信頼係数（α係数）を算出したところ，α＝0.588～0.842であった。累積寄与率は1・2年生の3因子で51.25%，3・4年生の3因子で56.51%であった。

両群について各因子の内容を見ると，1・2年生の第1因子は因子負荷量の高い順に「思いやりのある—わがままな」「元気な—疲れた」「きちんとした—だらしのない」などの7項目からなっており，「活力ある情」因子と命名した。第2因子は因子負荷量の高い順に「温かい—冷たい」「明るい—暗い」「良い—悪い」などの6項目からなっており，「肯定」因子と命名した。第3因子は因子負荷量の高い順に「楽しい—苦しい」「安定した—不安定な」「陽気な—陰気な」などの5項目からなっており，「安定した快さ」因子と命名した。

3・4年生の第1因子は因子負荷量の高い順に「温かい—冷たい」「意欲的な—無気力な」「明るい—暗い」などの9項目からなっており，「温和さ」因子と命名した。第2因子は因子負荷量の高い順に「のんびりした—こせこせした」「激しい—おだやかな」「思いやりのある—わがままな」の3項目からなっており，「余裕」因子と命名した。第3因子は因子負荷量の高い順に「楽しい—苦しい」「安定した—不安定な」の2項目からなっており，「安定した快さ」因子と命名した。

一元配置分散分析

質問紙の各項目を説明変数，各因子を従属変数とした一元配置分散分析の結果をTable 5，6に示す。なお，いずれの項目についても有意差がみられなかったものは表から除外した。

1・2年生では，「子どものころ幼稚園に行っていた」と答えた学生の「肯定」イメージ得点が「保育所に行っていた」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.05$）。「子どもが好き」と答えた学生の「肯定」イメージ得点は「嫌い」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.05$）。「将来子どもを持ちたい」と答えた学生の「肯定」イメージ得点は「持ちたくない」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.05$）。「将来子育てしたい」と答えた学生の「活力ある情」イメージ得点は「したくない」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.01$）。「将来家庭を持ちたい」と答えた学生の「肯定」イメージ得点は「持ちたくない」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.05$）。「将来子育てをうまくやる自信がある」と答えた学生の「活力ある情」および「安定した快さ」イメージ得点は「ない」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.01$）。「子育てはとても大切だ」と答えた学生の「活力ある情」「肯定」および「安定した快さ」イメージ得点は「やや大切だ」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.01$）。「仕事と育児は両立できる」と答えた学生の「肯定」および「安定した快さ」イメージ得点は「できない」と答えた学生よりも有意に高かった（「肯定」：$p<0.05$，「安定した快さ」：$p<0.01$）。「自分は親に大事にされている」と答えた学生の「肯定」および「安定した快さ」イメージ得点は「されていない」と答えた学生よりも有意に高かった（「肯定」：$p<0.01$，「安定した快さ」：$p<0.05$）。「自分は親に感謝している」と答えた学生の「肯定」イメージ得点は「していない」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.01$）。「自分は親を尊敬している」と答えた学生の「安定した快さ」イメージ得点は「していない」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.05$）。

3・4年生では，「将来子どもを持ちたい」と答えた学生の「安定した快さ」イメージ得点は「持ちたくない」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.01$）。「将来子育てをしたい」と答えた学生の「安定した快さ」イメージ得点は「したくない」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.05$）。「子育てはとても大変だ」と答えた学生の「安定した快さ」イメージ得点は「やや大変だ」と答えた学生よりも有意に低かった（$p<0.05$）。「将来家庭をとても持ちたい」と答えた学生の「主体的な温和さ」イメージ得点は「やや持ちたい」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.01$）。「将来子育てをうまくやる自信がある」と答えた学生の「主体的な温和さ」および「安定した快さ」イメージ得点は「ない」と答えた学生よりも有意に高かった（「主体的な温和さ」：$p<0.01$，「安定した快さ」：$p<0.05$）。「子育てはとても大切だ」と答えた学生の「主体的な温和さ」イメージ得点は「やや大切だ」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.01$）。「仕事と育児は両立できる」と答えた学生の「主体的な温和さ」および「安定した快さ」イメージ得点は「できない」

Table 5　社会福祉学科専攻大学1・2年生の子育てイメージと各質問項目の関連

	活力ある情			肯定			安定した快さ		
	*F*値	自由度	有意差	*F*値	自由度	有意差	*F*値	自由度	有意差
幼稚園/保育所への通園経験	0.939	147, 1	n. s.	6.853	150, 1	幼稚園＞保育所*	1.857	151, 1	n. s.
子どもが好き/嫌い	0.000	160, 1	n. s.	5.920	164, 1	好き＞嫌い*	0.635	165, 1	n. s.
将来子どもを持ちたい/持ちたくない	2.655	160, 1	n. s.	5.678	164, 1	持ちたい＞持ちたくない*	0.250	165, 1	n. s.
将来子育てしたい/したくない	11.351	160, 1	したい＞したくない**	26.551	164, 1	n. s.	1.027	165, 1	n. s.
将来家庭を持ちたい/持ちたくない	2.032	160, 1	n. s.	5.462	163, 1	持ちたい＞持ちたくない*	1.013	164, 1	n. s.
将来子育てをうまくやる自信の有無	8.757	160, 1	ある＞ない**	33.400	164, 1	n. s.	8.608	165, 1	ある＞ない**
子育てはとても大切/やや大切だ	8.120	159, 1	とても大切＞やや大切**	19.695	163, 1	とても大切＞やや大切**	8.745	164, 1	とても大切＞やや大切**
仕事と育児は両立できる/できない	2.846	160, 1	n. s.	5.669	164, 1	できる＞できない*	7.813	165, 1	できる＞できない**
自分は親から大事にされている/されていない	2.053	159, 1	n. s.	15.511	163, 1	されている＞されていない**	4.831	164, 1	されている＞されていない*
自分は親に感謝している/していない	2.552	159, 1	n. s.	15.431	163, 1	している＞していない**	0.876	164, 1	n. s.
自分は親を尊敬している/していない	2.509	159, 1	n. s.	5.218	163, 1	n. s.	5.222	164, 1	している＞していない*

*$p<0.05$,　**$p<0.01$

Table 6　社会福祉学科専攻大学3・4年生の子育てイメージと各質問項目の関連

	主体的な温和さ			余裕			安定した快さ		
	*F*値	自由度	有意差	*F*値	自由度	有意差	*F*値	自由度	有意差
将来子どもを持ちたい/持ちたくない	1.006	142, 1	n. s.	1.991	143, 1	n. s.	7.860	141, 1	持ちたい＞持ちたくない**
将来子育てしたい/したくない	8.207	142, 1	n. s.	0.653	143, 1	n. s.	5.196	141, 1	したい＞したくない*
子育てはとても大変/やや大変だ	0.149	140, 1	n. s.	1.590	141, 1	n. s.	4.782	139, 1	やや大変＞とても大変*
将来家庭をとても持ちたい/やや持ちたい	19.303	137, 1	とても持ちたい＞やや持ちたい**	2.646	138, 1	n. s.	0.011	136, 1	n. s.
将来子育てをうまくやる自信の有無	24.141	142, 1	ある＞ない**	5.625	143, 1	n. s.	5.612	141, 1	ある＞ない*
子育てはとても大切/やや大切だ	7.428	142, 1	とても大切＞やや大切**	0.845	143, 1	n. s.	0.157	141, 1	n. s.
仕事と育児は両立できる/できない	9.340	142, 1	できる＞できない**	2.438	143, 1	n. s.	4.440	141, 1	できる＞できない*
自分は親から大事にされている/されていない	8.886	141, 1	されている＞されていない**	0.028	142, 1	n. s.	0.124	140, 1	n. s.
自分は親を尊敬している/していない	10.690	142, 1	している＞していない**	0.626	143, 1	n. s.	0.006	141, 1	n. s.

*$p<0.05$,　**$p<0.01$

と答えた学生よりも有意に高かった（「主体的な温和さ」：$p<0.01$，「安定した快さ」：$p<0.05$）。「自分は親から大事にされている」と答えた学生の「主体的な温和さ」イメージ得点は「されていない」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.01$）。「自分は親を尊敬している」と答えた学生の「主体的な温和さ」イメージ得点は「していない」と答えた学生よりも有意に高かった（$p<0.01$）。

考　察

まず上述の t 検定の結果より以下のことが明らかになった。まず，子育て全般に関しては1・2年生よりも3・4年生のほうが肯定的なイメージを持っていた。また「思いやりのある―わがままな」の項目に関しても，3・4年生のほうがポジティブなイメージを抱いていた。このことより，3・4年生は子育てに関し，より充実感に満ちたイメージを抱いていると考えられる。ただし，「はっきりした―ぼんやりした」の項目については1・2年生のほうが肯定的であり，1・2年生のほうが子育てを「はっきりした」ものだと捉えていると考えられる。

子育てに関するイメージの因子分析の結果からは，1・2年生と3・4年生のいずれにおいても3因子が抽出され，「安定した快さ」と命名された因子も両群において抽出された。従って，大学1～4年生の年代の若者は，おしなべて子育てを安定し快いものとイメージしていることが示唆された。これは本田（2004）の研究成果を支持するものであった。ただし，1・2年生においては「活力ある情」および「肯定」と命名された因子が，3・4年生においては「主体的な温和さ」および「余裕」と命名された因子がそれぞれ抽出されるという差異が見られた。これは加齢に伴って学生の子育てに対するイメージが成熟し，子育てをより温和で余裕に満ちたものととらえるようになったと推察されるが，詳細な裏づけは今後の課題だといえよう。

分散分析の結果からは「子どもが好き」「将来子どもを持ちたい」「将来子育てしたい」「将来家庭を持ちたい」「将来子育てをうまくやる自信がある」「子育てはとても大切だ」「仕事と育児は両立できる」「子育てはとても大変なものではない」といった意志や考えを持っていることが，子育てに関するイメージのポジティブさと関連することが明らかとなった。このことから，子どもの好き嫌いについてはそもそも個人差があるものだとしても，若者が子どもを持ち，子育てをしたり家庭を持ったりしたいと希望し，子育ては過度に大変なものではないし仕事と両立できる大切なものだと考えることができ，必然的に子育てをうまくやる自信を持てるような教育や社会環境を整備することが，子育てのイメージを肯定的なものにするために重要であり，ひいては子育て支援にもつながるものと思われた。

加えて，「自分は親から大事にされている」「自分は親に感謝している」「自分は親を尊敬している」といった考えを持ち良好な親子関係を自覚していることが，子育てに関するポジティブなイメージと関連があることが明らかになった。これは掛川（1996），石松・江藤・山本（2003），伊藤（2003）などの先行研究の結果を支持するものであった。

1・2年生と3・4年生の間で興味深い差異が見られたのは「将来子どもを持ちたい・持ちたくない」「将来子育てしたい・したくない」「子育てはとても大切だ・やや大切だ」「自分は親から大事にされている・されていない」および「自分は親を尊敬している・していない」の各項目と，「安定した快さ」因子の関連についてであった。「将来子どもを持ちたい・持ちたくない」および「将来子育てしたい・したくない」に関しては，1・2年生では「将来子どもを持ちたい」「将来子育てしたい」と答えた学生と「持ちたくない」「したくない」と答えた学生との間に「安定した快さ」イメージ得点の有意差はみられなかったのに対し。3・4年生では「持ちたい」「したい」と答えた学生が「持ちたくない」「したくない」と答えた学生よりも有意に高かった。一方「子育てはとても大切だ・やや大切だ」「自分は親から大事にされている・されていない」および「自分は親を尊敬している・していない」に関しては，1・2年生では「子育てはとても大切だ」「自分は親から大事にされている」「自分は親を尊敬している」と答えた学生が「やや大切だ」「大事にされていない」「尊敬していない」と答えた学生よりも「安定した快さ」イメージ得点が有意に高かったが，3・4年生では有意差がみられなかった。

しかし本研究では，t 検定の結果，イメージ因子分析の結果および分散分析の結果における両群の差異の原因については，単純に加齢に起因するものなのか，教育的な要因が関係しているのか，もしくは全く別の要因によるものなのかについては明らかにすることはできなかった。また，幼稚園に通っていた学生が保育所に通っていた学生よりも子育てに関する「肯定」イメージ得点が高い理由についても明らかにできなかった。今後の課題であると思われる。

付　記

本研究は一部石橋学術振興基金助成金の援助を受けた。

文　献

本田由記子，女子短期大学生の「子育て」に関する研究―信念とイメージからの視点―．純真紀要，**44**，31-40，2004.

細井　勇・古橋啓介・秦　和彦・林　ムツミ・本田潤子，田川地域における高校生の子育てについての意識調査．福岡県立大学人間社会学部紀要，**13**，(2)，51-74，2005.

井上正明・小林利宣，日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観．教育心理学研究，**33**，(3)，253-260，1985.

石松直子・江藤節代・山本捷子，大学生の持つ育児イメージと対児感情―看護学科学生と他学科学生との比較―．日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report，**2**，145-154，2003.

伊藤葉子，中・高校生の親性準備性の発達．日本家政学会誌，**54**，(10)，801-812，2003.

掛川恭子，大学生の子育てに関する意識―子育てのイメージと意味・価値―．家族関係学，**15**，11-21，1996.

厚生労働省ホームページ．http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai05/kekka2.html#2，平成18年6月27日閲覧.

小倉襄二・小松源助・高島　進・編，社会福祉の基礎知識．有斐閣，1978.

大西　良・辻丸秀策・大岡由佳・鋤田みすず・福山裕夫，精神保健福祉現場実習における精神障害者イメージとストレス感情との関連性．久留米大学心理学研究，**5**，163-170，2006.

Osgood，C.E. The nature and measurement of meaning，1952. Psychol. Bull：**49**；197-237.

鋤田みすず・辻丸秀策・大西　良・岩永直美・大岡由佳・山口智哉・福山裕夫・石田重信・牧田　潔・内野俊郎，患者家族と一般家族の統合失調症に対する社会的距離とイメージ―多面的調査からの比較―．久留米大学文学部紀要社会福祉学科編，**5**，57-67，2005.

高橋重宏・山縣文治・才村　純・編，子ども家庭福祉とソーシャルワーク．有斐閣，2005.

氏原　寛他編，心理臨床大事典．培風館，2004.

占部尊士・大西　良・辻丸秀策・福山裕夫，福祉学生の対象者別イメージ比較―ホームレスと精神障害者イメージから―．久留米大学文学部紀要社会福祉学科編，**6**，107-114，2006.